龍　光　遺　跡

島根県営住宅（益田市仙道団地）建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１０年 3月
益 田 市 教 育 委 員 会

序

益田市美都町は益田川上流域に位置し、自然豊かな農業地域であります。都茂地区では近年まで都茂鉱山が営まれ活況を呈すとともに、中世での東仙道地区は益田氏 11 代益田兼見の出自地とされ、近年の発掘調査の成果により、その関連がいちだんと注目を集めております。

この度、県営住宅建設工事に伴い龍光遺跡の発掘調査を実施したところ、古代・中世遺跡の一端が明らかになり、貴重な資料を得ることができました。龍光遺跡からは近隣の奈良・平安期の役所関連遺跡である酒屋原遺跡や下都茂原遺跡を一望できます。これらの遺跡とともに東仙道の歴史を解明するうえで注目される遺跡と評価させるものです。

本書は、発掘調査の概要をまとめたものです。こうして地域の歴史や文化財保護に対する理解と関心を深めるうえで広くご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査にあたって全面的にご協力をいただきました多くの関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成 22 年３月

益田市教育委員会
教育長　三浦正樹

例　言

本書は 2007(平成 19)年度に、益田市教育委員会が島根県益田県土整備事務所の委託を受け実施した島根県営住宅（益田市仙道団地）建設工事に伴う龍光遺跡の発掘調査報告書である。

1．発掘調査は平成 19 年５月２日から同年６月 20 日まで行っている。同年６月９日には地元住民への調査成果の報告を目的とした現地説明会をそれぞれ行った。
2．調査に要する経費は島根県益田県土整備事務所が負担した。
3．発掘調査を行った地番は島根県益田市美都町仙道８０１番地である。
4．調査は下記の体制で行った。

調査主体	益田市教育委員会
事務局	益田市教育委員会文化財課
調査員	大野芳典　調査補助員　世良　啓　池本　篤（嘱託職員）
調査指導	島根県教育庁文化財課　是田 敦
	島根県文化財保護審議会委員　田中義昭
	島根県立三瓶自然館　中村唯史

5．調査に従事していただいた方々は次のとおりである（敬称略）。
　○発掘調査作業　梅津厚子、梅津照子、岡原良夫、寺戸定人、花本清勝、藤岡千鶴子
　○室内整理作業　梅津照子、岡原良夫、藤岡千鶴子、野村初恵、又賀大輔
6．挿図中の方位は磁北を示す。また遺構略号のＰは柱穴状遺構を示す。
7．本書掲載の遺跡出土資料及び実測図、写真等の資料は益田市教育委員会で保管している。
8．編集及び執筆は大野が行った。

第１章　調査の経緯と経過

１．事業概要

島根県営住宅（益田市仙道団地）は、昭和 52、53 年に建設後、他の近年の県営住宅と比較し住戸が狭小で、老朽化が著しくなったため、良好な居住環境を提供するために立替建設事業が進められることとなった。建設予定地の南側は既に美都町教育委員会による平成 14 年度町営住宅建設工事に伴う試掘調査で龍光遺跡の存在が確認されており、今回の建設工事に伴い、５箇所埋蔵文化財の試掘調査を実施したところ、弥生土器や須恵器、陶磁器等の遺物を検出した。このことから、古代から中世に至る集落の営みを確認した。

２．埋蔵文化財の取扱

事業者である島根県益田県土整備事務所は、当初の建物部分の工事設計変更に伴い平成 18 年 12 月 13 日付けで分布調査を益田市教育委員会に依頼、平成 18 年 12 月 20 日付けで発掘調査の結果について報告、取り扱いを協議した。これにより事業者は、事業計画の変更が難しいことから、平成 18 年 12 月 14 日付けで埋蔵文化財発掘届出が提出され、益田市教育委員会から島根県教育委員会に対して平成 19 年４月 20 日付けで埋蔵文化財発掘通知を提出した。事業者とは平成 19 年４月２日付けで委託契約書の締結のうえ、発掘調査を実施することとなった。

３．発掘調査の経過

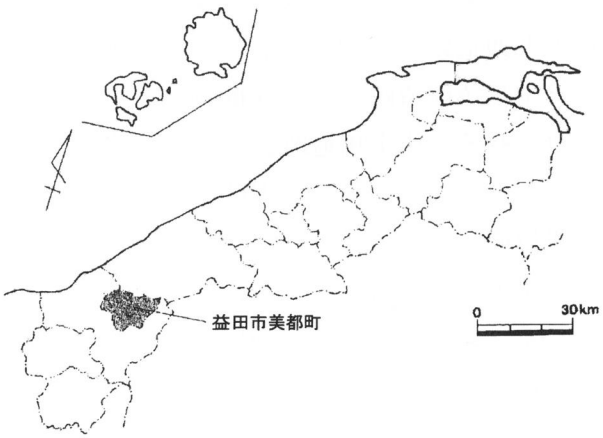
事業実施予定地の県営住宅建設以前は水田であった。調査区は、今回の県営住宅建設工事の建物建設予定のＡ棟、Ｂ棟、Ｃ棟をそれぞれＡ区、Ｂ区、Ｃ区として設定した。周辺工事である建物外溝工事、電柱建設工事、階段及び通路部分については、事業者と協議の上、調査成果を元に、工事時での立会調査で対応することとした。

主にＡ棟、Ｂ棟建設予定地を平成 19 年５月初旬から着手し、工事着手予定の同年７月を期限としての６月 17 日に調査を終了している。なお同年６月６日には、島根県文化財保護審議会委員　田中義昭氏、島根県教育庁文化財課 是田氏に、６月８日には島根県三瓶自然館　中村唯史氏に立地環境の視点から、調査指導を受けている。また地元の方々を中心に調査成果を知って頂くために翌日６月９日には現地説明会を開催し、前夜の大雨に関わらず 70 名のご来場を頂いた。

調査による石積墓、掘立柱建物跡等の遺構検出の結果、同年 11 月に、建物周辺の一部外溝部分の立会調査を３箇所実施し、遺跡の広がりを確認した。

平成 20 年度には既存建物を撤去後のＣ棟建設予定地に５箇所の試掘調査を実施した。建物基礎工事の予定掘削深度まで著しく攪乱を受けており、遺跡は存在しないと判断された。６月から報告書作成のための遺物整理を実施し、平成 21 年度には報告書作成を取り組んだ。

調査の成果は、市内の発掘調査速報展や美都町内公民館の各種講演会、文化祭等に展示・報告し活用した。



第１図　益田市美都町の位置

第２章　龍光遺跡の位置と環境

１．地理的環境

遺跡の位置

龍光遺跡は、島根県益田市美都町仙道に所在する。遺跡のある美都町は、中国山地の嶺線に近い山間地帯に位置し、益田市の東南部を占める。

主要河川としては東南部の春日山に源を発し、町域を西下して日本海に注ぐ益田川と、三隅川の支流である板井川、矢原川、丸茂川がある。生活域はこれら河川の流域に形成された盆地状の平地に展開する。すなわち、西から益田川筋の東仙道地区、都茂川との合流地が都茂地区、矢原川筋が二川地区である。龍光遺跡は東仙道地区に含まれる。

ＪＲ益田市駅からは国道 191 号線を経て、直線距離で南東部に約 13km の距離にある。

龍光遺跡は、益田川の中流左岸、支流生角川が形成する小規模な扇状地（標高約 97m前後）、北東に下都茂原、北西に酒屋原を一望できる丘陵の裾部に位置する。

２．歴史的環境

以下では龍光遺跡を中心とする周辺地域、主に美都町の遺跡の概要を各時代について述べる。なお文中の（数字）は第１表の番号と対応している。

古代

縄文時代の遺跡としては、二川地区に位置する黒曜石や石斧、晩期土器が出土した本郷遺跡（49)、東仙道地区の前遺跡（61）では浅鉢が出土し、晩期の遺跡として知られる。

弥生時代の遺跡としては、酒屋原遺跡（60）では前期の土器が出土し、龍光遺跡、下都茂原遺跡（73)、大年ノ元遺跡（65)、唐干田遺跡（64）では流れ込みと思われるが、後期の土器が出土し、集落の存在が窺える。

古墳時代では、後期以降の横穴式石室を主体部にもつ三谷古墳（４）が代表的である。２基現存し、割石積みのやや胴張状無袖石室であり、三谷川に沿う平地を見下ろす山腹に開口している。三谷川筋の平地に古代集落を形成していった村落的首長層が葬られたものと推定できる。

奈良・平安時代には、古代政権がまとめた記録、『続日本後紀』の承和３年（八三六)、『日本三代實録』の元慶５年（八八一）の記事で、「都茂郷丸山」での銅山開発に関するものが記載されている。９世紀代にこの銅山操業に当時の政府が本腰を入れて取り組んでいた様子が窺える。

酒屋原遺跡では、多数の古代須恵器と円面硯数点、豊富な輸入陶磁器が大量に出土し、古代の役所関連遺跡から中世における在地領主の拠点的遺跡への変遷を推測させる貴重な遺跡である。また下都茂原遺跡では、緑釉陶器、黒色土器が出土し、役人住居集落などの役所関連遺跡として注目される。唐干田遺跡、大年ノ元遺跡、本郷遺跡からも古代から中世にわたる土器が出土しており、それぞれの地区で中核的な集落が存続・発展しつつある様相が垣間見られる。

中世以降

中世前半の遺跡としては、東仙道地区の粟島原遺跡（57）と東仙道土居遺跡（58）が特に注目される。粟島原遺跡は三谷川筋の河岸段丘上に位置し、同安窯系青磁碗、白磁皿、白磁合子、湖州鏡などが副葬された墓地で、東仙道土居遺跡においては、三谷川と益田川の合流点付近に位置し、館推定地の一画から五輪塔や日引石製宝篋印塔とともに褐釉四耳壷、常滑系壷、土師質土器壷を蔵骨器とした集石墓が発見されている。東仙道地区に有力な土豪勢力が盤距していたことが想定される。

中世後半の遺跡としては、都茂地区山本の大年ノ元遺跡、丸茂の森下遺跡（68）が注目される。大年ノ元遺跡は益田川の扇状地にあり、銅精錬に関する方形竪穴建物や掘立柱建物数棟が検出され、周辺から陶磁器類・銅滓が出土している。丸茂城の東側に位置する森下遺跡では、青白磁梅瓶や天目茶碗等の出土により在地領主丸茂氏の館跡と推定されている。

山城跡については代表的なものとして竪堀等を持つ板井川城跡（16）・丸茂城跡（19）・城ヶ谷城跡（54）・四ツ山城跡（22）・背戸山城跡（56）等が挙げられる。いずれの遺跡も地区の入口付近から盆地状の平野を見下ろせる位置に立地している。

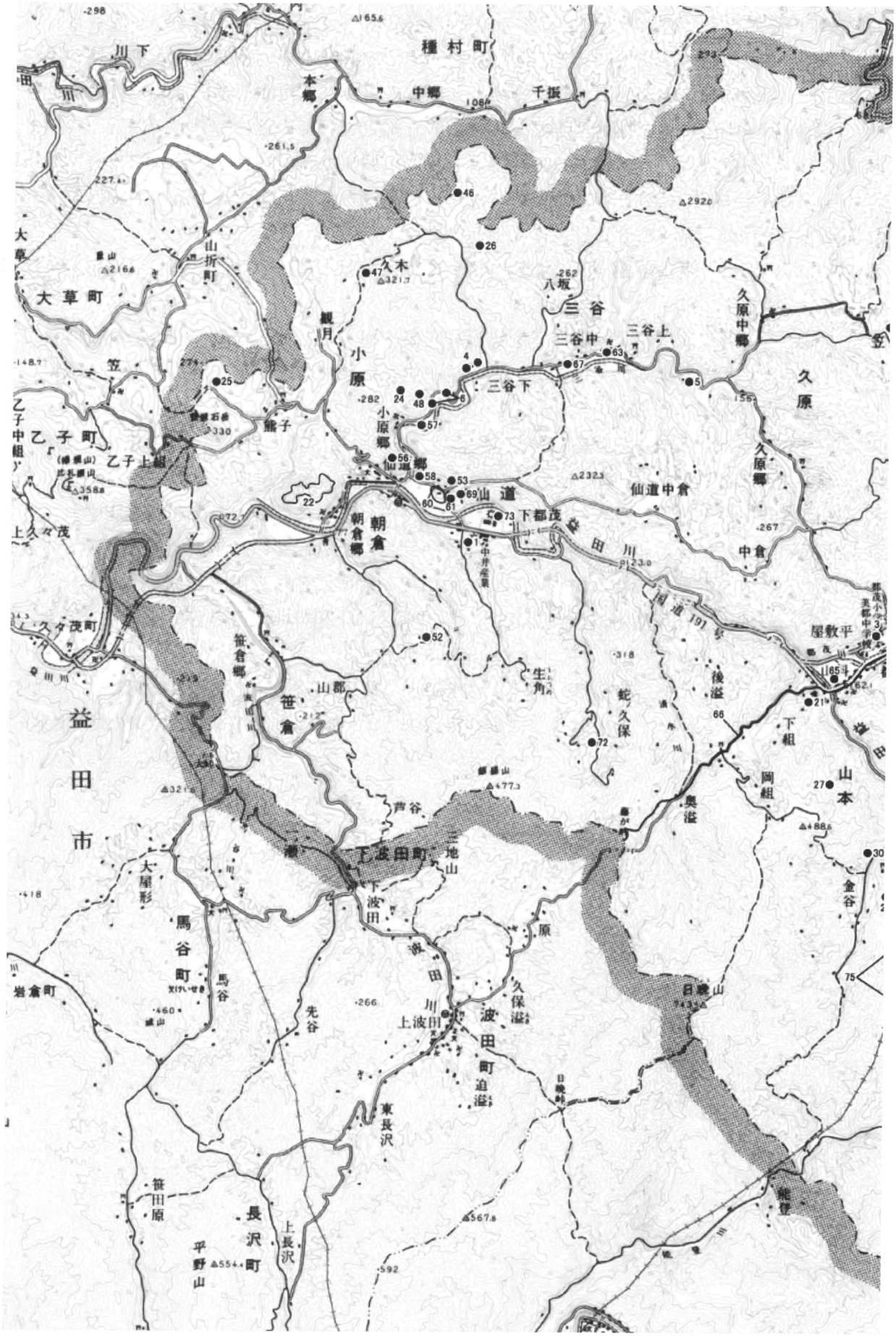
石造物については、夏山墓地（23）、土井古墓（70）、殿明古墓（72）において五輪塔、宝篋印塔が存在している。

中世において、益田氏は南北朝期に三宅御土居を築き拠点とした。その前段階の鎌倉時代には東仙道を拠点としたと考えられている。これら益田川上流域での遺跡調査からの具体的な様相の解明が今後の研究課題である。

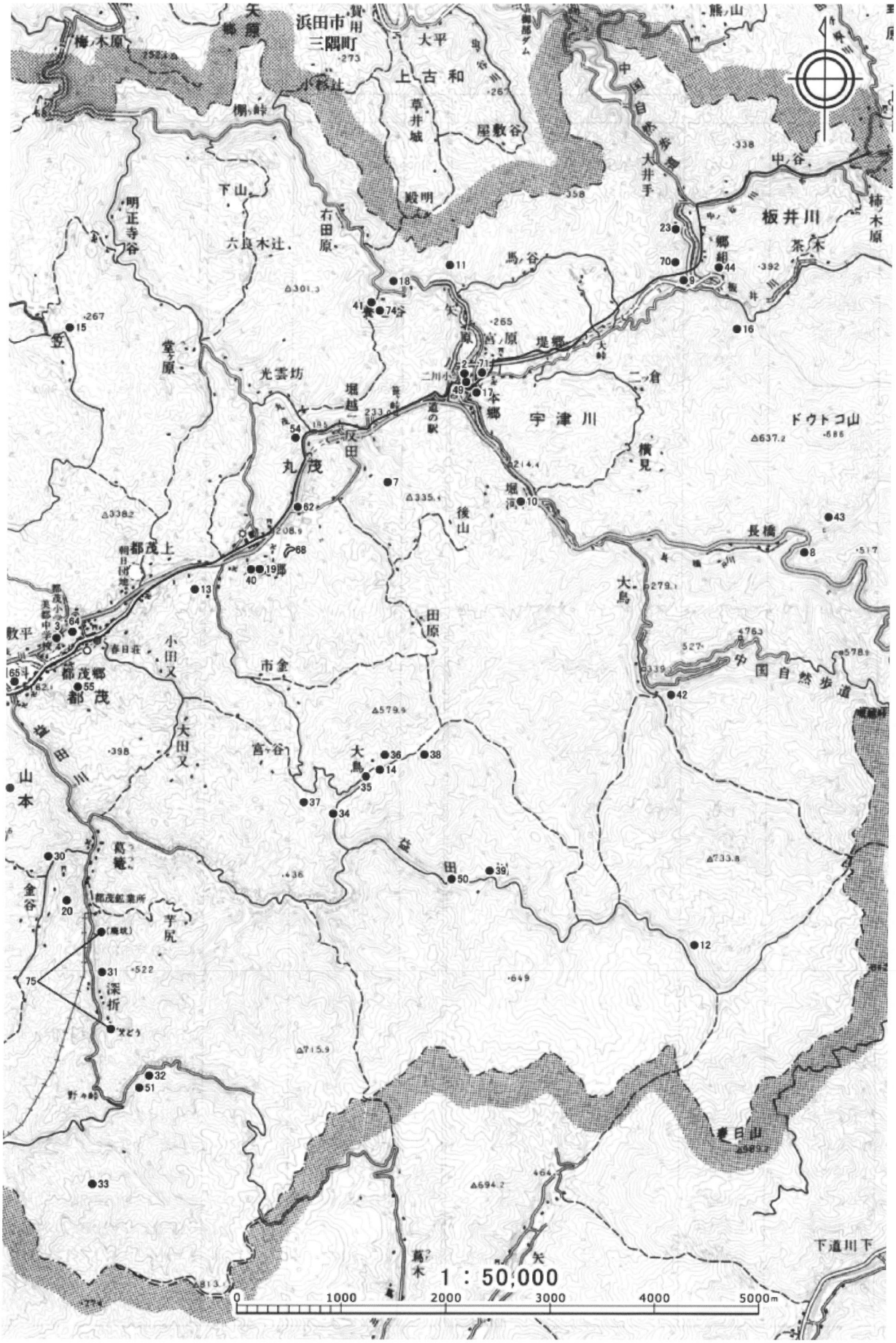
また、銅山経営の発展により、都茂地区、中でも山本地区は江戸時代には大森銀山の支配下にあり、「銀山天領地」として隆盛を極めたと伝えられている。能登川の谷沿いに残る屋敷跡・寺院跡等には銅の採掘と製（精）錬に関わる遺跡と考えられる。美都町内で所在が確認されている製鉄関連遺跡については、中・近世に営まれた「たたら」跡もしくは銅製（精）錬に関わる遺跡と考えられる。未発掘調査であるが、産業史・銅山史の解明に今後の調査が期待される。

なお、東仙道地区・都茂地区は浜田藩政区、二川地区は津和野藩政区として明治へ至る。

参考文献　鈴政信市著 1968『美都町史』美都町史編纂委員会
内藤正中編 1995『日本歴史地名体系 33　島根県の地名』平凡社



第２図　美都町内遺跡分布１（東仙道・都茂）

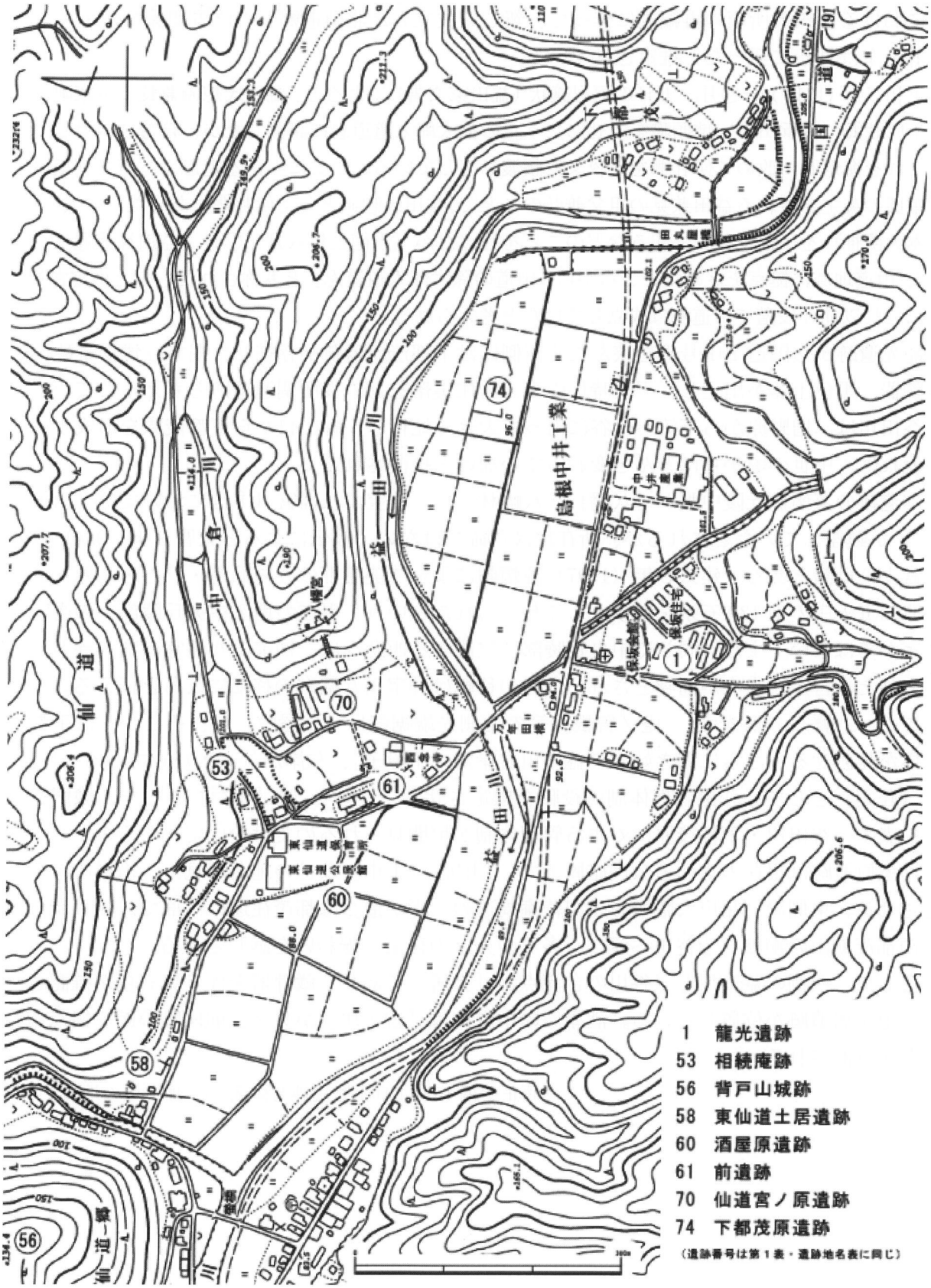


第３図　美都町内遺跡分布図２（都茂・二川）

番号	名　　称	種　　別	概　　要
1	龍光遺跡	集落跡	石積墓、弥生土器、須恵器、陶磁器
2	お熊ごろ古墳	古墳	円墳、石積墳丘、消滅
3	屋敷平横穴・遺跡	横穴・散布地	土師器、石室、消滅
4	三谷古墳群	古墳	２基
-1	三谷１号墳	古墳	円墳、須恵器
-2	三谷２号墳	古墳	円墳、須恵器
5	都賀根城跡	城跡	刀剣
6	小原古墳群	古墳	２基
-1	小原１号墳	古墳	須恵器、消滅
-2	小原２号墳	古墳	円墳、消滅
7	丸茂上経塚	経塚	
8	長橋の庵寺跡	寺院跡	
9	恵則寺跡	寺院跡	
10	道智の庵寺跡	寺院跡	
11	宗光寺跡	寺院跡	
12	赤松谷上鈩跡	製鉄遺跡	
13	古城山城跡	城跡	
14	表屋鈩跡	製鉄遺跡	
15	鈩床鈩跡	製鉄遺跡	
16	板井川城跡	城跡	山城、郭、堀切、竪堀
17	宇津川城跡	城跡	山城、郭、堀切
18	養老谷城跡	城跡	山城
19	丸茂城跡	城跡	山城、郭、連続竪堀群
20	入船山城跡	城跡	山城
21	要害山城跡	城跡	山城、石垣、堀切
22	四ツ山城跡	城跡	山城、郭、井戸、竪堀
23	夏山墓地	古墓	五輪塔３基
24	掛所鈩跡	製鉄遺跡	
25	北ヶ溢鈩跡	製鉄遺跡	
26	新宅溢鈩跡	製鉄遺跡	
27	金ヶ崎鈩跡	製鉄遺跡	
28	火の迫鈩跡	製鉄遺跡	
29	金屋敷鈩跡	製鉄遺跡	
30	悪谷鈩跡	製鉄遺跡	
31	深折鈩跡	製鉄遺跡	
32	化粧谷鈩跡	製鉄遺跡	
33	吹屋床鈩跡	製鉄遺跡	
34	鍛冶屋敷鈩跡	製鉄遺跡	
35	大切鈩跡	製鉄遺跡	
36	床屋溢鈩跡	製鉄遺跡	
37	勝地鈩跡	製鉄遺跡	
38	田代鈩跡	製鉄遺跡	
39	鈩原鈩跡	製鉄遺跡	

番号	名　　称	種　　別	概　　要
40	馬頭鈩跡	製鉄遺跡	
41	鍛冶平鈩跡	製鉄遺跡	
42	大鳥鈩跡	製鉄遺跡	
43	ジャレ鈩跡	製鉄遺跡	
44	森平鈩跡	製鉄遺跡	
45	腰ヶ峠鈩跡	製鉄遺跡	
46	土井山城跡	城跡	
47	久木経塚	経塚	
48	竹城跡	城跡	
49	本郷遺跡	散布地	縄文土器、石斧、石鏃、須恵器 土師器、鏡、陶磁器
50	葛根薮経塚	経塚	
51	安養寺跡	寺院跡	
52	正明寺跡	寺院跡	
53	相続庵跡	寺院跡	古墓（品川大膳）
54	城ヶ谷城跡	城跡	山城、郭、堀切
55	都茂城跡	城跡	山城、郭、堀切
56	背戸山城跡	城跡	山城、郭、堀切
57	粟島原遺跡	古墓	青磁碗、白磁小皿、小壷、銅鏡、硯
58	東仙道土居遺跡	その他の墓	中国製壷、常滑系壷、土師質壷 宝篋印塔の一部、加工石(五輪塔一部)
59	水池遺跡	散布地	Ｒ60と統合
60	酒屋原遺跡	集落跡	縄文土器、弥生土器、須恵器 陶磁器、円面硯
61	前遺跡	散布地	縄文土器片、弥生土器片、土師器片
62	丸茂宮下遺跡	散布地	須恵器、土師器、陶磁器
63	専教寺下遺跡	散布地	須恵器、土師器、青磁
64	唐干田遺跡	散布地	土師器片、弥生土器片、陶磁器片
65	大年ノ元遺跡	集落跡	掘立柱建物跡、竪穴建物跡、陶磁器 土師器、銅滓、鉄滓
66	津和野奥筋往還	街道跡	近世街道跡
67	大石前遺跡	散布地	土師質土器、陶磁器
68	森下遺跡	集落跡	掘立柱建物跡、礎石建物跡、須恵器 土師質土器、陶磁器、石斧
69	仙道宮ノ原遺跡	散布地	土師質土器
70	土井古墓	古墓	五輪塔２基
71	大切遺跡	散布地	土師器、陶磁器
72	殿明古墓	古墓	宝篋印塔３基
73	下都茂原遺跡	集落跡	掘立柱建物跡、須恵器、土師器、 緑釉陶器、黒色土器、陶磁器、井戸
74	丸子山遺跡	墓又は経塚	集石遺構、土師質土器壷、大銭、銭貨
75	都茂鉱山	鉱山跡	

第１表　美都町内遺跡地名表



第４図　周辺の遺跡と地形

３．調査対象地周辺の地理的・歴史的環境

遺跡の所在する東仙道地区は、中世では山道郷と呼ばれ、益田庄を構成する庄内の単位所領である。もと益田本郷の一部であったが、鎌倉期に分割されて山道郷として成立し、さらに南北朝期における益田氏所領の再編成に伴って、新しく成立した北山道郷との位置関係などから、東山道郷とよばれるに至ったと推定されている。

正和二年（1313）一〇月一五日の阿忍譲状（益田家文書）によると、益田氏惣領兼長の後家阿忍は、先年伊甘郷（現浜田市）地頭職を「せんたう」の孫太郎入道道忍に譲渡したが、自分に敵対したとしてこれを悔返し、改めて伊甘郷を鶴夜叉に譲渡し直している。ここにみえる道忍は、南北朝期の益田氏中興の英主とされる益田兼見の祖父兼弘のことで、益田氏惣領として伊甘郷にあった臼口大明神（御神本大明神）を山道に移して祀るなどのことを行ったが（永徳三年八月一〇日「益田祥兼置文」同文書）、山道地域に拠点を定めたところから「山道の孫太郎入道道忍」とも称されたものと推定され、すでにこれ以前の段階で山道郷は成立していたと考えられる。

龍光遺跡から国道 191 号線を挟んだ北西側には下都茂原遺跡が存在し、掘立柱建物跡数棟や緑釉陶器、黒色土器が出土し、平安時代の役人居住集落などの役所関連遺跡と考えられている。

益田川は、増野原から下流へは谷に沿って大きく蛇行し、谷出口から下都茂原を形成する。この流れは、中世の頃からほとんど変わっていないと推測される。

本遺跡の東南側丘陵中腹が「八幡」、「八幡林」で、神宝山八幡宮（中世においては「山道八幡宮」）が鎮座していたとされるが、所在地は明確ではない。社伝によると天暦８年（954）豊前宇佐宮より勧請とある。建久８年（1197）源頼朝によって美濃郡のうち仙道・三谷・小原・朝倉・久原の五ヵ庄の地 130 石余を神領として与えられたという。現在の地区中央丘陵部への遷宮時期は定かではない。また、同じく中央丘陵部に位置する西念寺は、神宝山八幡宮の別当寺として建立された真言宗西光寺が前身とされ、同寺の移転は神宝山八幡宮の移転によると伝える。

この「八幡」、「西光寺」「庵ノ曽根」等の北側先端裾部は「出屋敷」で、そこからは下都茂原全体が見渡せる。さらに開き始めの益田川右岸が「中障子」、左岸が「石木戸」である。「障子」は「荘司」として、荘園管理体制の役職を推定させる。「木戸」は「城戸」として、城門や水門等を表す。益田川・下都茂原に対する管理体制が垣間見られるのではないであろうか。

酒屋原遺跡は現在の東仙道公民館周辺で、「市尻」「下市」などの地名が見え、市場の存在を推定させる。東側の、品川大膳所縁の相続庵周辺の「寺ヶ迫」は都茂往還の一部で、江戸時代では天領都茂鉱山の銅鉱石を益田へ運び、多くの人々の往来、賑わいを感じさせる。

そして、西側の益田川と三谷川の合流点が「土居」であり、蔵骨器を伴う集石墓が確認された東仙道土居遺跡が位置している。酒屋原の中央には「古土居」が見え、前段階の館や拠点施設の存在が推測される。

内藤正中編 1995『日本歴史地名体系 33　島根県の地名』平凡社

奥都茂地
都茂地
古川原
部屋
横路
国道191
中陸子
田中
石木戸
西光寺
庵ノ曽根
八幡林
八幡
一之峠
藤ヶ瀬
出屋敷
下都茂原
外河原
仙道
下都茂原
河平
飛石平
寺ヶ迫
中倉川
益田川
神森山
八幡宮
馬落
宮ノ原
山根
隠居
相続庵
下市
市尻
羽根庵
前
上駄才
中駄才
下駄才
車田
古土居
水池
上酒屋
土居
仙道一郷
背戸山
東仙道小学校
東仙道住宅
錦橋
岩原
新宮
古寺
神田
久保坂会館
龍光
屋敷田
中屋敷
久保管利
田中

第５図　周辺の小字名

第３章　調査成果の概要

１．基本層序

現地は、従前の県営住宅建設に伴い、一部攪乱・削平が著しいが、基本的に表土下は旧水田耕作土が堆積している。調査地の北側は試掘調査の結果から、湿地帯が広がっていたと考えられ、西側は生角川の旧河道と考えられる。

本遺跡の層序は以下のように観察された。

第１層：表土

第２層：旧水田耕作土

第３層：黒褐色土（遺物包含層：平安時代～中世の遺物）

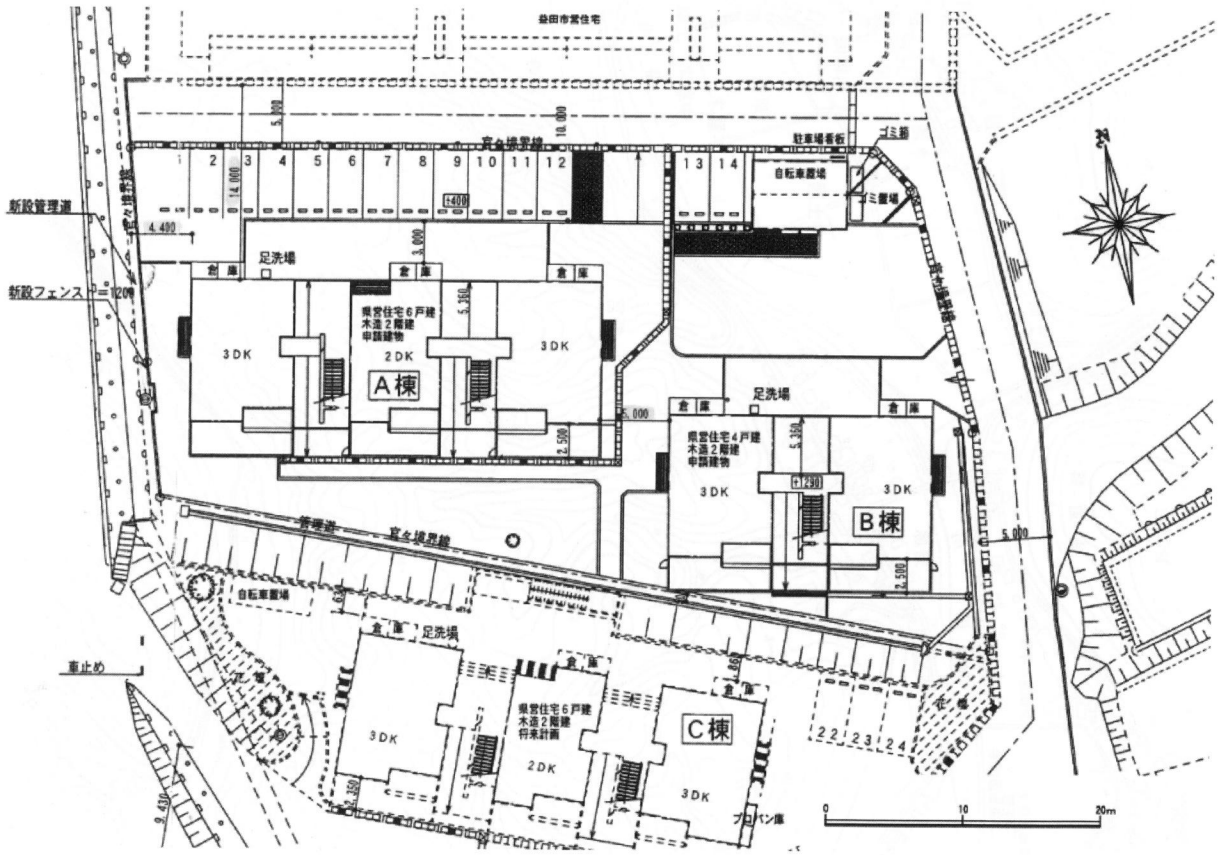
第４層：黄褐色礫土

第５層：赤褐色礫土（遺物包含層：奈良時代～平安時代の遺物）

第６層：暗褐色礫土

第７層：青灰色礫土

第３層について、Ｂ区南東側で僅かに確認でき、Ａ区には存在しない。第４層について、Ｂ区上面で柱穴を確認しているが（標高約 97ｍ前後）、Ａ区では柱穴を確認できなかった。第５層について、Ａ区南東部から北西方向へ薄くなっていき、南東部では土師器・須恵器が集中して出土している。これらの遺物は流れ込みによるものと考えられた。そして石積墓を構成する礫群は、この層の上半部を削る堆積礫の一部を使用したと考えられた。第６層で弥生土器が出土し、第７層に遺物は確認できなかった。



第６図　調査区位置図

２．遺構

石積墓

Ａ区南側から外溝部分にかけて検出された遺構である。

構成する礫の大きさは約 20cm 、上部には約 30cm のものもあり、規模は一辺約 3.5m、残存高は約 70cm 、形状はほぼ方形を呈す。これは、ある程度の水量、強さを持つ流れによって堆積した礫を、人為的に集め、盛ったものであると考えられた。東側の側面では黄褐色粘土が認められた。高まりを整えるものと考えられる。この高まりのほぼ中央最下部から須恵器甕（遺物番号 23）が出土した。焼成は不良で灰白色を呈している。蔵骨器である可能性が高いが、甕の内部に骨や灰などは認められず、埋納構造は把握できなかった。甕の推定容積から、再葬墓の可能性もある。礫中には、同時期と考えられる須恵器蓋（遺物番号 22）が出土している。

出土遺物から、奈良～平安時代前半の遺構と考えられる。

掘立柱建物

Ｂ区南東部から外溝部分にかけて検出された遺構である。

規模は二間×二間、柱間は約 2.5mである。柱穴の分布状況から、規模がさらに大きくなる（庇付あるいは三間×三間）可能性がある。この建物跡は、概ね背後丘陵の軸方向に揃えるかたちであった。

柱穴の規模は直径約 22cm 前後、その全ての埋土には炭化物が含まれていた。P.05 の埋土上位で須恵器坏（遺物番号 24）が、P.04 の埋土中位で土師器皿（遺物番号９）と白磁（遺物番号 26）が出土し、P.05 の埋土下位で白磁碗の口縁部（遺物番号 25）が出土した。

これらのことから、12 世紀後半以降に廃絶した建物跡と考えられる。

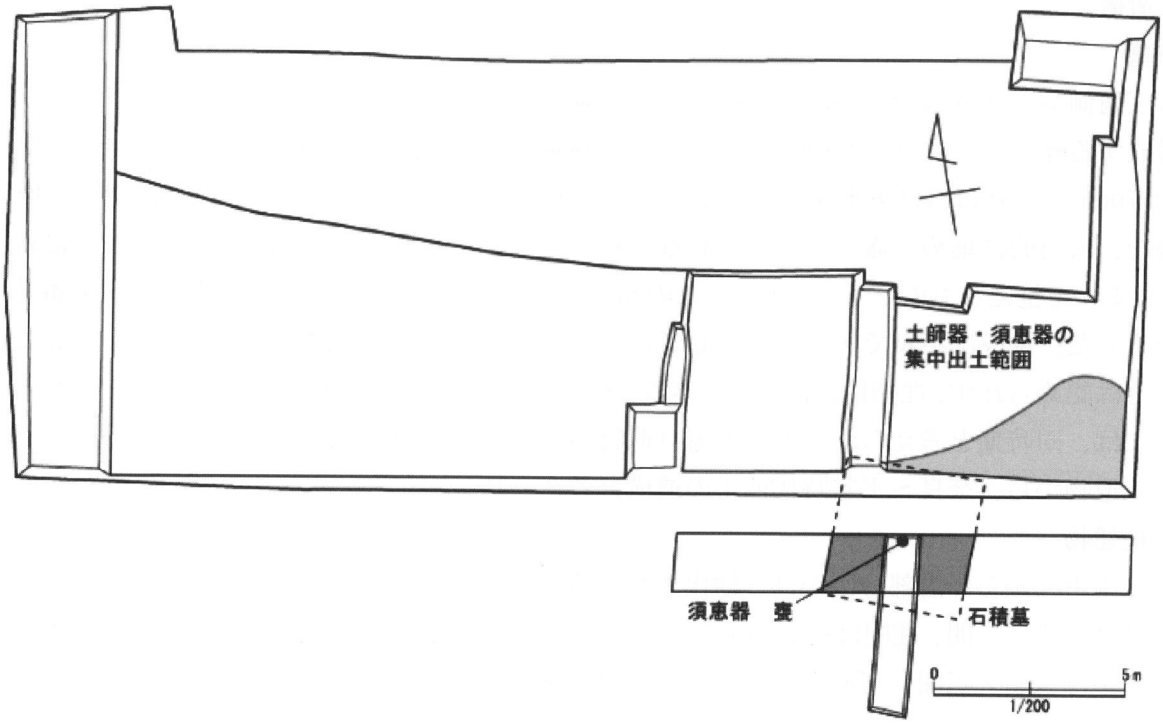
柵列

Ｂ区の南東部から外溝部分にかけて位置し、柱間は約 2.5mを測る。埋土に炭化物が含まれ、掘立柱建物と軸がほぼ重なり規模などが類似するが、関連性は不明である。

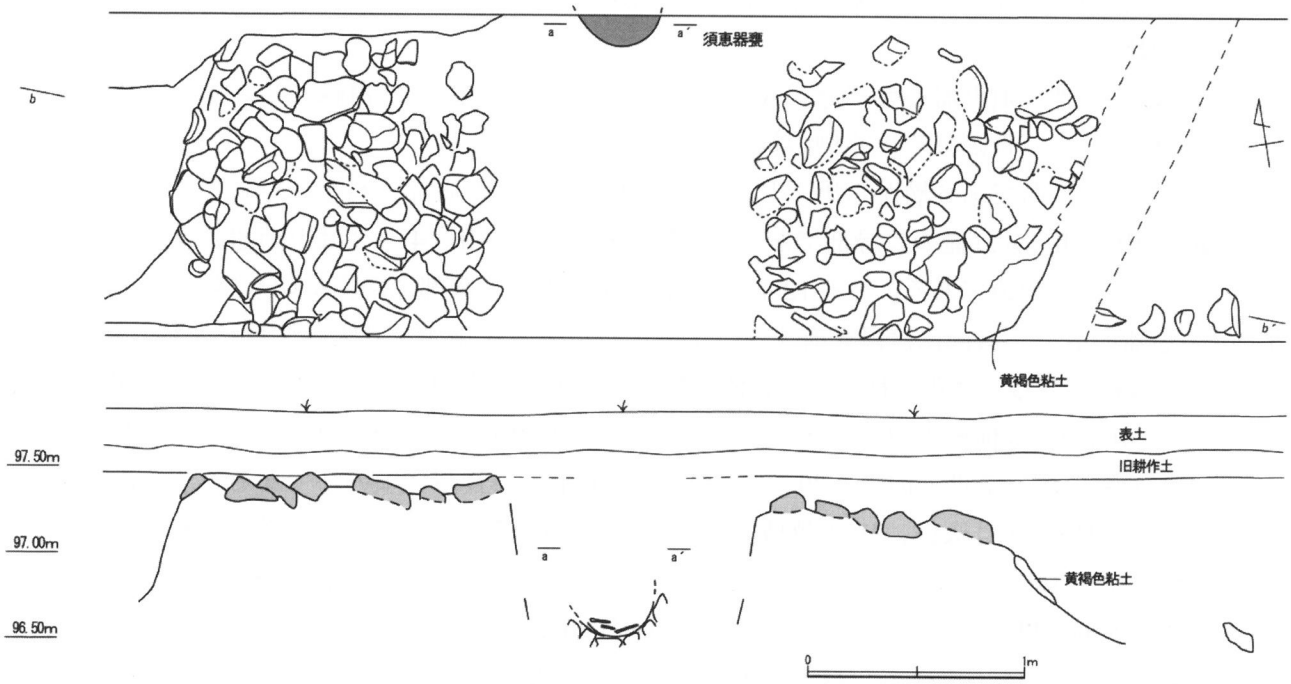
３．出土遺物

土師器の壷や甕、須恵器の大部分がＡ区の南東部で出土している。白磁については、Ｂ区掘立柱建物の柱穴から、青磁はその北側の包含層から出土している。

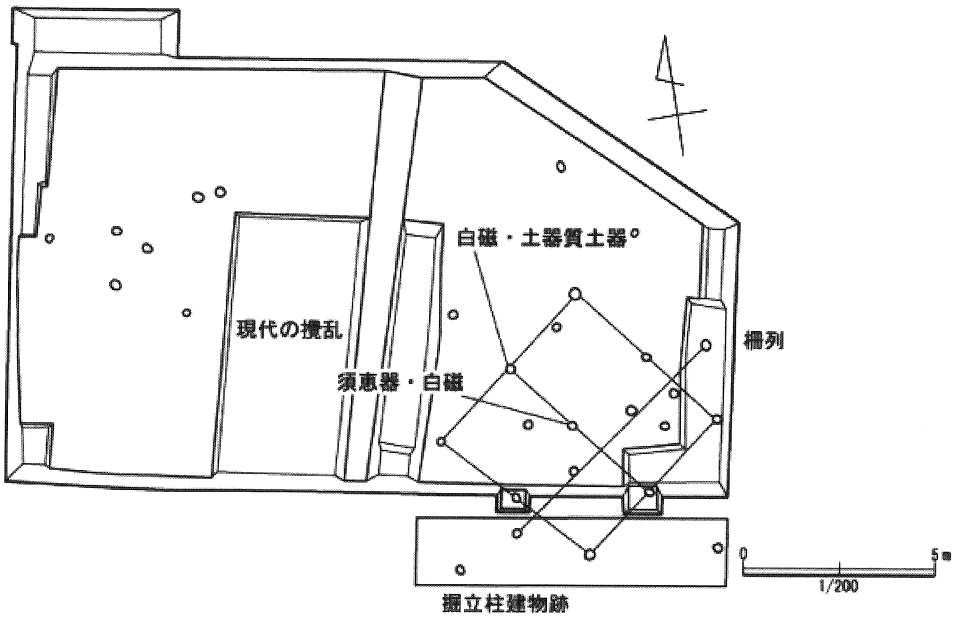
１～３は弥生土器で第６層から出土している。１、２は壷の底部。ハケ目を施している。時期は中期末のⅣ－Ⅱ。３は壷の口縁部である。時期は後期のⅤ－Ⅱ。４～８は土師器の甕の口縁部。内面にケズリ痕が明瞭である。９～12 は土師器の皿である。底部に回転糸切り痕が僅かに残る。13 は須恵器の蓋で、肩部には段を有する。上部にはカキ目を施す。６末～７世紀。14 は坏身である。15 は瑞である。穿孔されており、体部に「×」印が２度刻まれている。６～７世紀頃のものである。16、17 は横瓶の肩部であろう。７世紀頃で自然釉がかかる。18、19 は高坏である。19 は小型のものか、７世紀前半。20、21 は８世紀前半の奈良時代頃の坏である。ナデ調整が丁寧である。色調が 20 は灰色、21 の焼成は不良で灰白色を呈している。22 は蓋で、輪状つまみの跡が残る。23 は甕で、焼成は不良で灰白色を呈す。口径は約 22cm を測る。24 は高台付坏である。石見空港編年Ⅲ期で９世紀頃。25 は白磁碗のⅣ類である。玉縁状口縁で釉は灰白色を呈す。26 は白磁の碗か。27 は青磁の口縁部である。オリーブ灰色の釉がかかる。28 は口縁部に雷文を施す。16 世紀頃のものである。



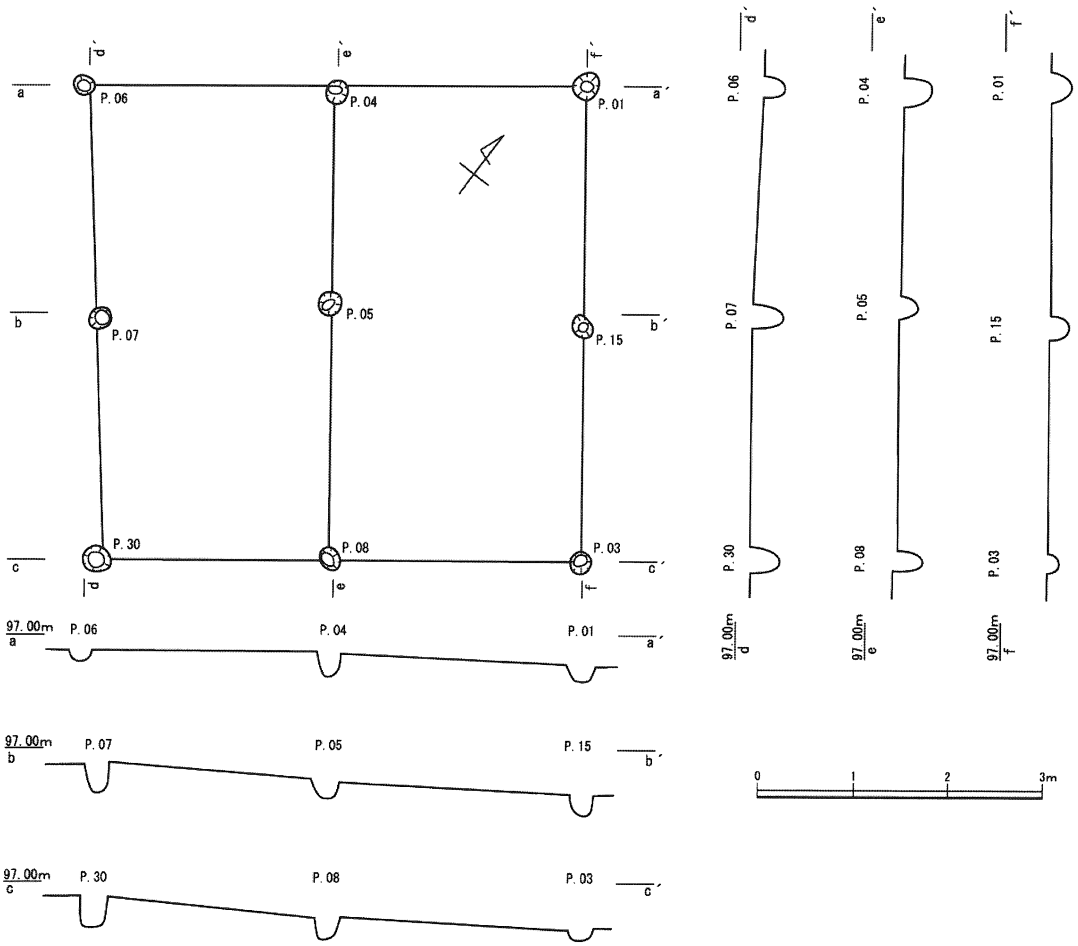
第７図　Ａ区遺構配置図



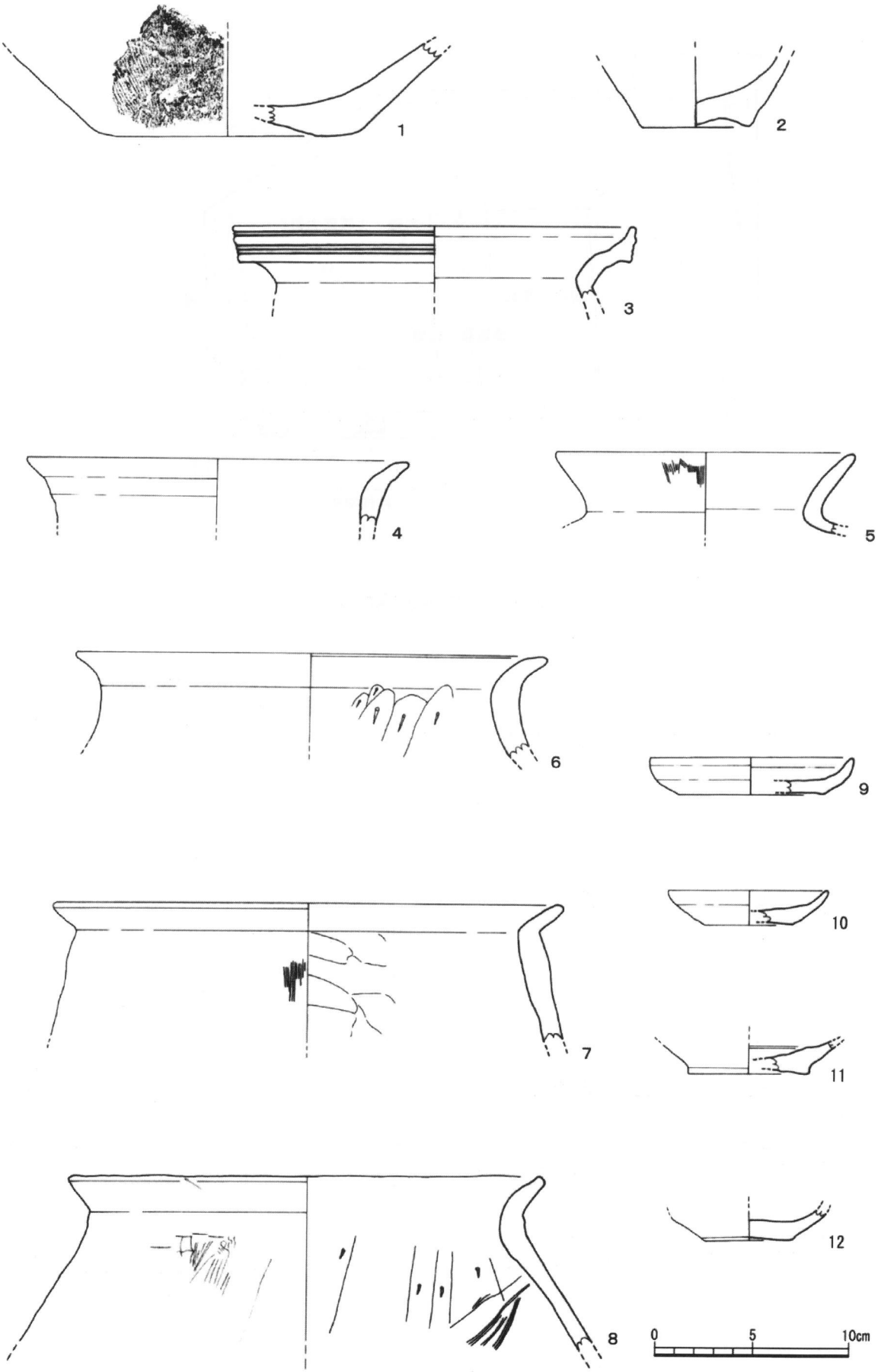
第８図　石積墓　遺構図



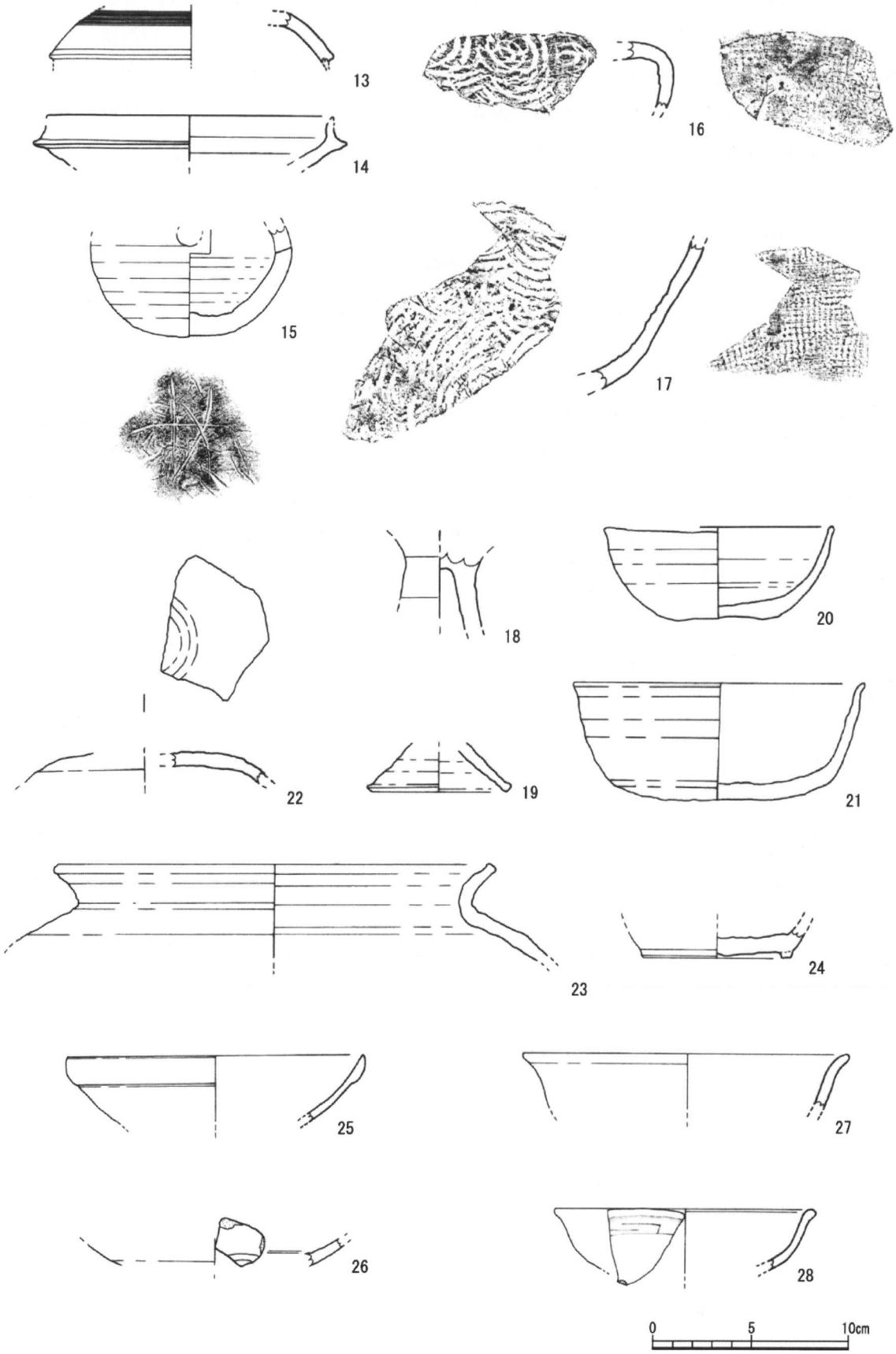
第９図　Ｂ区遺構配置図



第 10 図　掘立柱建物遺構図



第 11 図　出土遺物（弥生土器・土師器）



第 12 図　出土遺物（須恵器・陶磁器）

第４章　まとめ

龍光遺跡は、益田川の中流左岸、支流生角川が形成する小規模な扇状地（標高約 97ｍ前後）、北東に下都茂原、北西に酒屋原を一望できる丘陵の裾部に位置する。確認した遺構は、石積墓１基、掘立柱建物跡１棟、柵列１列である。出土遺物としては、弥生土器（中期末や後期）、古墳時代の土師器、奈良・平安時代の須恵器、陶磁器（青磁・白磁）が出土し、年代幅が広い。

これらの遺構と遺物は東仙道地区における古代から中世にかけての変容を考える上で貴重な資料である。

発見された石積墓の時期は、出土遺物から奈良時代から平安時代前半頃と考えられる。構造は、周辺に調査例がなく、類例を待ちたいが、遺体や蔵骨器に土を盛って築く形態などがある終末期古墳の伝統をひく可能性がある。ちなみに、三谷川筋には古墳群が認められるが、東仙道地区の平野部で古墳は認められていない。

掘立柱建物跡は中世前半以降の遺構と考えられ、概ね背後丘陵の軸方向に揃えるかたちである。

出土遺物は、奈良・平安時代の須恵器や中世前半期の白磁について、周辺の酒屋原遺跡や下都茂原遺跡と比較すると極端に出土量が少ない。器種は壷、甕を主体としているが、須恵器には坏、瑕、甑、横瓶、高坏等が含まれ、多様である。また、焼成が不良なものや変形したものも多く含まれることから、周辺に須恵器窯が存在する可能性も含んでおきたい。

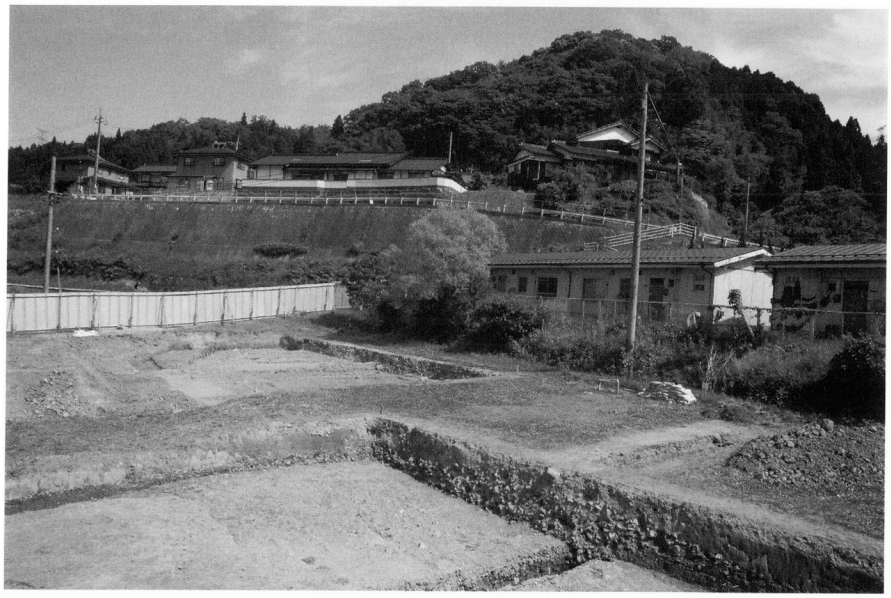
周辺の発掘調査や地名調査などから、益田川は現在の位置とほとんど変わらず、下都茂原遺跡のように比較的河川の影響の少ない箇所や、龍光遺跡の背後、南丘陵部に集落本体が存在し、調査地はその周辺部であったと考えられる。本調査区の北側は湿地帯が広がり、西側には旧河道が存在し、調査区全体に礫が多く、条件が良い立地とは言い難い。

地理的に南丘陵部は、周辺を見渡せる良好な立地であることや、今回の出土遺物の年代幅の広さ、磨耗の少なさから、周辺に継続して当該期の集落が展開していたと考えられる。

この地域での古墳時代から奈良・平安時代への変遷期の様相、また益田川・生角川の流路と周辺の酒屋原遺跡や下都茂原遺跡を中心とする同時代の周辺遺跡との立地関係、つまり地形に応じた生活との関わり、そして当該期における東仙道地域の様相を知る上で、今回の調査は非常に意義が深く、今後の周辺の調査も期待される。

最後に、現地調査から報告書の刊行に至るまで多くの方々の御指導と御協力いただいた各位に深甚の謝意を申し上げる次第である。

1．調査地遠景（東南から）



2．調査地遠景（西から）

3．調査区遠景（南西から）

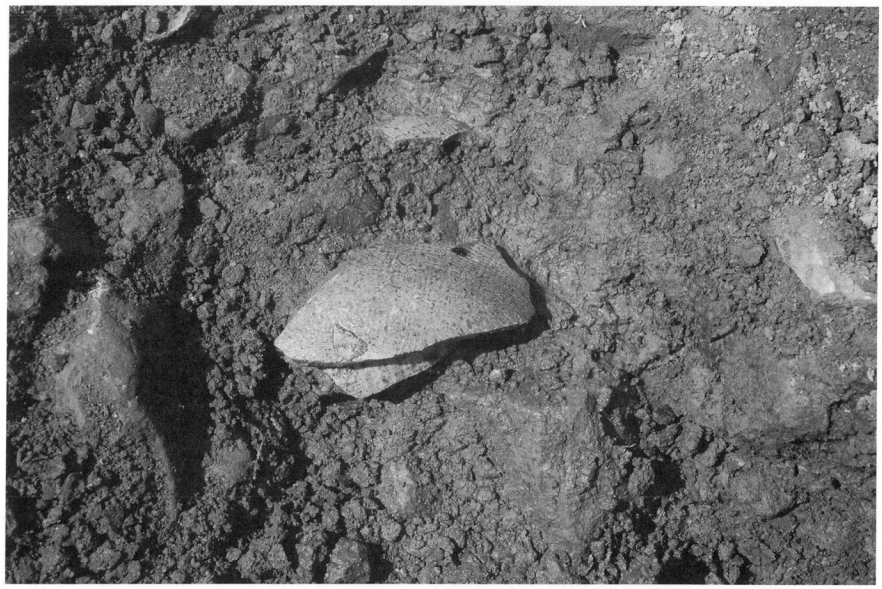
図版二

1．A区　完掘状況（北から）

2．A区　東壁土層

3．A区　南壁土層

1．A区　土師器甕出土状況



2．A区　須恵器出土状況

3．A区　弥生土器出土状況

図版四

1．A区　南トレンチ（南から）

2．A区　南トレンチ　石積墓　須恵器出土状況（南から）

3．A区　石積墓　須恵器出土状況（南から）

1．A区　石積墓　土層断面（北東から）

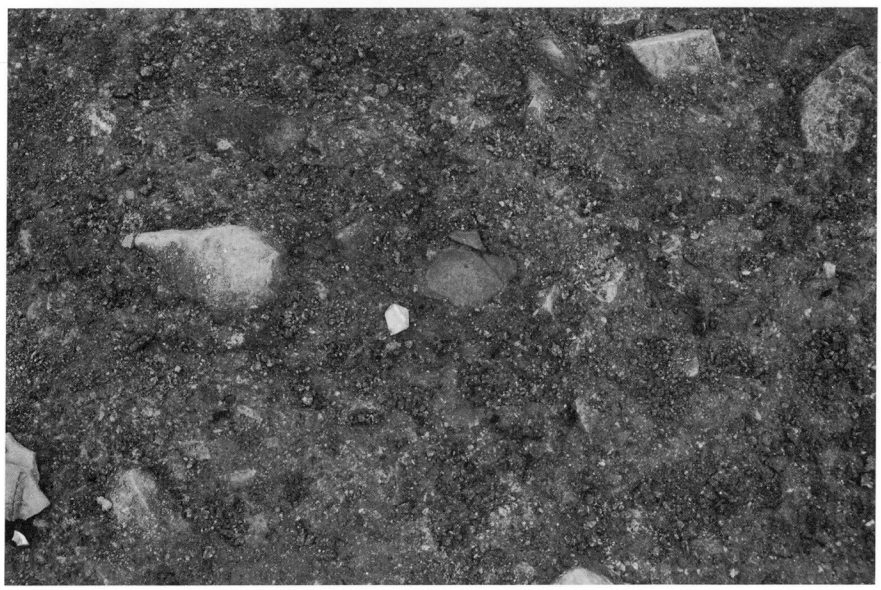
2．A区　石積墓　検出状況

3．A区　石積墓　検出状況

図版六

1．B区　掘立柱建物跡　（北から）

2．B区　柱穴内須恵器出土状況



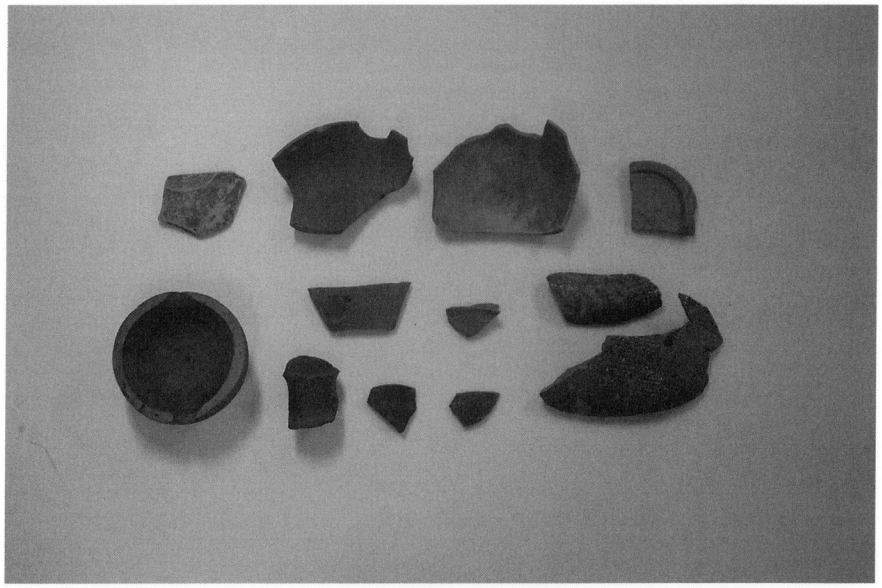
3．B区　柱穴内白磁・土師器出土状況

1．現地調査風景

2．調査指導会

3．現地説明会

図版八



1．出土遺物（須恵器）

2．出土遺物（土師器）

3．出土遺物（白磁・青磁）

報告書抄録

ふりがな	りゅうこういせき
書名	龍光遺跡
副書名	島根県営住宅（益田市仙道団地）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	大野芳典
編集機関	益田市教育委員会
所在地	〒698-0033　島根県益田市元町11番15号　TEL0856－31－0623
発行年月日	2010年3月25日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
龍光遺跡（りゅうこういせき）	島根県（しまねけん）益田市（ますだし）美都町（みとちょう）仙道（せんどう）	32204	R68	34°40′31″	131°56′22″	2008.5.2～2008.7.2	550 ㎡	住宅建設事業

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
龍光遺跡	集落跡	古代～中世	石積墓1基 掘立柱建物跡1棟 柵列1列	弥生土器 土師器 須恵器 青磁・白磁	

龍光遺跡

－島根県営住宅（益田市仙道団地）建設工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成22年3月発行

編集・発行　益田市教育委員会

島根県益田市元町11番15号

印刷　のさか印刷